

臨海緑地における緑化植栽木の活着について（Ⅱ）

福岡県林業試験場 中島康博
小河誠司

1. はじめに

有明緑地の緑化木植栽は1976年春第1期植栽、翌年の1977年春の第2期植栽によって、ほぼ完了した。

第1期植栽分の活着調査の結果については前回報告¹⁾した。更に第2期植栽（1977年3月～4月初旬）のものについて、同年9月、11月活着調査を実施したので、その結果を報告する。本調査を実施するにあたり、53年3月まで当場に在職の川島為一郎元専門研究員も一緒に調査研究されたことを付記する。

2. 調査地の概況

緑地の概要は前報¹⁾に述べた通り、道路をへだてて直接有明海となる臨海緑地である。この緑地は自然林に近い緑地を造成する目的のため、植栽樹種数も多く、暖帯林樹種を主とし、一部道路、施設予定地周辺には、修飾的緑化樹種も植栽されている。樹種の植栽配置は、道路、施設予定地周辺の同一樹種による列状、群状植栽以外の緑地の大部分が3～5樹種程度の組合せの混交植栽である。

植栽時に植穴底部にネッカリッチを1穴当り、4～2kg使用し、施肥は植栽1ヶ月後、化成肥料（22—10—10）を1本当り、100～50g施用し、ツツジ類は油粕を施用した。下刈は4月下旬、8月の2回実施されたが、8月下刈までに低木類は可成り雑草に覆われているところがあった。第2期植栽地も第1期植栽地同様植栽前年にアカシア類（フサアカシア、メラノキシロン）850本が防風、日蔭、肥料木的作用を考慮して植栽されている。

3. 結果と考察

調査の結果をとりまとめたものが表—1である。59樹種10072本植栽に対して、枯損本数843本で、枯損率8.36%である。前報の第1期植栽は、51樹種15493本植栽に対し、枯損本数770本、枯損率5%と比較すれば3%枯損率が多くなっている。第1期、第2期を通して、32樹種が両期に植栽され、残り46樹種は第1期19樹種、第2期27樹種がそれぞれ異った樹種となっている。植栽時から2～3ヶ月の活着に必要な期間の気象条件は両年共、特別の異常はなかった。第2期の

本調査について、樹種別の枯損率を見れば、0～81%まで種々存在している。この中で特に悪いものについて、その原因を明らかにしておきたい。

この緑地では場所によって、雑草の繁茂がひどく、下刈のおくれと相まって、植栽された苗木が小さく、完全に雑草に覆われたところでは活着後枯損したものがあつた。又同様などところで、樹種によっては、あまり影響がなかったものもあつた。活着後枯損したものは、サツキ、ハマヒサカキ、サカキなどがある。あまり影響されなかったものは、ゴンスイ、カリンである。

カナメモチは活着後夏季イラガの一種に食害されたことが主な枯損原因である。ヤシヤブシの枯損率が高いのは1期の100%活着からみて、明らかに不良苗を植栽したため、別の場所に植栽したのも同様な結果であつた。オガタマノキ、タブ、ヤブニッケイは苗木にも問題があると思われるが、アカシア植栽地域内のもは葉色もよく、枯損木が少ないことから考えれば裸地に直接小型苗木を植栽することに無理があるようにも思われる。陰樹的特性を有し、このため大型苗木の導入によるか、可成りの密植にするか、あるいは樹下植栽にするかなどが考えられる。イチイガシ、ツバキについても同様の考え方をとり入れることが望ましいと思われた。

スギ、ヒノキ、ヒラドツツジなども割合高い枯損率となっているが、この枯損原因としては、植栽場所が平坦地に近いため、過湿地になりやすく、根ぐされによるものである。以上のほかにマテバシイ、ゲッケイジュの枯損もあつたが、これらの原因ははっきりしなかった。

以上枯損率の高い樹種については、それなりの原因が認められるので、これらの問題を解決すれば、枯損率が更に減るものと考えられる。又この緑地はこれだけ多くの樹種をクロマツの2月植栽を除いて、3月～4月初にかけて、一斉に植栽したため樹種によっては植栽適期でなかったものもあると思われる。又これだけ多くの本数になると苗木の掘取りから出荷、植栽までに1週間以上かかるものもあり、その間の管理が十分であつたかどうか活着率に影響があるものと思われる。本緑地は試験的な意味も多少入れて、一般市販樹種以外のものも使用したので、はじめて育苗したも

のもあり、皆優良苗であったとは考えられない。
 2カ年にわたり、32樹種について植栽して、1期、2期共ほとんどが似たような活着率となっていることから、一応緑化用小型苗の活着の目安になると思われる。十分注意を払って緑化植栽すれば、特別の事情がないかぎり、95%程度の活着は可能であると思われる。緑化事業は終局の目的である緑地にすみやかに達成することであり、そのためには計画→基盤造成→植栽→活着→生長……をスムーズに進むことが必要である。植栽から6ヶ月後の活着調査までの短い間においても、十分な管理がされないと種々の支障が生じて、活着にも影響するものである。特に本緑地は基盤造成完了の段階で、砂塵防止、土砂流出防止の意味で全面に

芝吹付け工事をしたことと小型苗木を主としたため、下刈は管理上重要な業務となる。又計画段階のことになるが臨海緑地は平面的になりがちのため、排水には十分配慮することが肝要である。

同じ活着の中にも良く生育しているものから、たゞ生きていくだけのものまで、幅の広い生育があり、ほんとうはしっかり根をおろし、良好な生長が望ましいわけで、今後活着後の生長についても引続き調査を実施する予定である。

引用文献

- (1) 中島康博, 小河誠司, 川島為一郎: 日林九支研論, 31, 195~ 196, 1978

表-1 有明緑地植栽樹木活着調査表(2期分)

樹種	植栽本数	枯損		植栽時の苗木の状態				樹種	植栽本数	枯損		植栽時の苗木の状態			
		本数	%	苗齢	苗丈cm	出荷法	育苗法			本数	%	苗齢	苗丈cm	出荷法	育苗法
アオギリ	29	0	—	3	120	×	ミ	タイワンフウ	36	3	8	2	150	○	ミ
アキニレ	50	0	—	4	150	○	ミ	タバ	231	84	36	2	30	ポ	ミ
アジサイ	209	2	1	4	60	○	サ	タラヨウ	11	0	—	5	120	○	ミ
アベリア	56	3	5	4	50	○	サ	ツバキ	20	13	65	5	100	○	サ
アラカシ	382	35	9	6	200	○	ミ	トウネズミモチ	337	4	1	5	200	○	ミ
イスノキ	75	6	8	5	150	○	ミ	トベラ	1932	48	3	4	60	○	ミ
イチイガシ	42	7	17	4	100	○	ミ	ナギ	8	1	13	7	120	○	ミ
イヌビワ	197	7	4		120	ポ×	ミ	ナメノキ	71	1	1	4	100	○	ミ
イヌマキ	7	0	—	3	150	○	ミ	ナワシログミ	304	15	5	4	60	○	ミ
ウバメガシ	26	1	4	3	80	ポ	ミ	ネズミモチ	989	9	1	14	100	○	ミ
オガタマノキ	68	24	35	3	70	ポ	ミ	ハクサンボク	46	5	11	3	100	○	サ
カクレミノ	91	15	17	4	100	○	ミ	ハマヒサカキ	295	55	19	5	50	○	サ
カナメモチ	42	38	90	4	60	ポ	サ	ハマビワ	11	1	9	3	40	ポ	ミ
カリン	18	0	—	2	60	ポ	ミ	ヒラギナンテン	37	2	5	5	70	○	ミ
クス	266	15	6	3	100	ポ	ミ	ヒノキ	39	16	41	3	100	○	ミ
クチナシ	593	46	8	4	80	○	サ	ヒメユズリハ	592	27	5	3	100	○	ミ
クヌギ	19	0	—	3	100	○	ミ	ヒラドツツジ	23	16	70	5	50	○	サ
クロガネモチ	81	2	3	5	150	○	ミ	ホルトノキ	99	6	6	5	100	○	ミ
クロマツ	35	0	—	5	200	○	ミ	マサキ	603	24	4	2	60	○	サ
ゲッケイジュ	14	2	14	4	70	ポ	サ	マテバシイ	486	81	17	5	150	○	ミ
コウヨウサン	19	0	—	5	200	○	サ	マメツゲ	130	0	—	4	30	○	サ
コクチナシ	40	0	—	4	20	○	サ	モッコク	42	0	—	5	100	○	ミ
コブシ	12	0	—	5	150	○	ミ	モチノキ	42	0	—	4	120	○	ミ
ゴンズイ	24	3	13	2	80	×	ミ	ユリノキ	44	0	—	3	150	○	ミ
サカキ	26	11	42	3	60	ポ	サ	ヤシヤブシ	31	25	81	2	150	×	ミ
サツキ	61	43	71	4	40	○	サ	ヤブニッケイ	79	64	81	3	60	ポ	ミ
サンゴジュ	247	5	2	7	150	○	サ	ヤマハゼ	70	4	6	2	100	ポ	ミ
シャリンバイ	552	18	3	3	60	○	ミ	ヤマモモ	46	3	7	3	100	○	ミ
スギ	22	6	27	3	100	○	ミ								
セイヨウバクチ	88	41	47	3	100	○	サ								
タイワンヌグス	27	6	22	2	60	ポ	ミ								
計	10072	843	8												

註 1. 枯損%は、以下四捨五入 2. 出荷法の○は鉢付、×は鉢なし、ポはポット苗
 3. 育苗法のサ、はさし木より ミ、は実生よりの繁殖分 4. イヌビワの苗齢は山取りのため不明